戦後、わたしがさまよい歩いた道

koberyo1

青森県は弘前市の母の実家で暮らした様子については、先にパブーで発表した「母の実家」で紹介した。

昭和２３年のことである。一時は青森で暮らしたわたしだが、子どもの頃から住みつづけてきた東京に戻りたい気持ちが冷めやらず、グラグラと沸騰してきた。向学心のたかぶりは、ますます燃えさかった。そうして矢も盾もたまらず、青森を出奔することになる。やがて東京にいる父と共同生活を送りながら中央大学の経済に入学することができた。

大学に入学したのには理由がある。わたしはまだ若かった。当時、二十代の青年である。これから人生どうあるべきかを考えたのである。

青森の片隅にあって農業で生計を立てるのもよいが、――戦後すぐの日本は深刻な食糧難であったが、青森では食べものに困ることはなかった）、これから日本は焼け野原から雄々しく復興してゆくという予感があり、再生への「熱」がわたしを誘惑した。わたしはいても立ってもいられなくなった。

自分一生の生活を、ここで大転換すべきと考え、実際行動にうつしたのである。

わたしの青春の熱量と、日本の猛々しく再興せんとする力が感応したのである。

わたしだけではない。戦争を生き延びた多くの老若男女がそうだったと確信する。生活は楽ではなかったし、日々食べるもののない生活がつづいた。すさんだ時代でもあった。

にもかかわらず、常識では考えられないような凄まじいエネルギーが湧き上がり、日本人の底力とでもいうべきか、文句をたれず、働きに働き、忍びながら忍び、我慢に我慢をかさねながら協力を惜しまず、市井の人たちは知恵を出しあった。

日本は輝かんばかりの復興を遂げた。まさに奇跡であった。そしてわたしは昭和26年３月、中央大学を卒業することになるのである。

しかし、卒業したはいいが、すぐに就職先が見つかったわけではない。とにかく現金が欲しかった。白い米を腹いっぱい食べたかったのである。

英会話ができないわたしだったが、中央大学で知り合った友人に外資系銀行への就職を斡旋してもらった。横浜から通学していたＹ君に依頼したのである。Ｙ君はすでに某外資系銀行で働い

ていた。当時は大変、高価であったトンカツを彼にご馳走し、銀行への仲介をとるよう頼んだのである。たしか横浜の伊勢崎町のトンカツ屋であった。

迂闊にもあとでわかったことだが、英会話ができる人はカウンターや要職につける可能性はあった。サラリーも高かった。しかし会話ができなかった人は、「メールデパートメント」（社内で郵便物等を配り歩く係）や「アカンティングデパートメント」に配属され、日本人の責任者の下で勤務するというやり方であった。いわば下働きである。

外資系は日本の企業とは違い、実際的というか冷徹である。英語ができないので日本人のＨさんという人と面接した。明日からきてくれと言われ、さっそく勤務することになった。なんとも気の抜けた入行であって、東京駅前の丸ビルの東京支店に毎日、通うことになった。仕事は、これも中央大学の先輩にあたる、メールデパートメントの責任者であり、日本人のＴさんの下で働くことになった。

仕事は何かというと、Ｌ／Ｃ（レターオブクレジット、一種の為替のようなもの）や重要な手紙が大量にくるので、これの封を切って中身をだすのである。これが案外、大変な仕事であった。責任者のＴさんがはじめＬ／Ｃかふつうの手紙かどうかを仕分けしてくれるのを待たねばならない。なぜなら、わたしたちは英語がわからないのでＴさんの仕分けが必要なのだった。

つぎに仕分けされた手紙の封を開けてゆく。Ｌ／Ｃばかりをまとめたり、個人宛ての文書を開けて、需要だったりそうでないものをさらに仕分けしたりした。全部封書であるから封を切るばかりではなく、中身の書類をクリップで止めたりもした。

これを三か月ばかり続けた。わたしもだんだん作業に慣れてきて、「アカウントデパートメント」のＨさんの下に異動になった。これはいわば「利息の計算係」とでもいった仕事である。

Ｈさんの指導で、毎日「アデングマシン」と呼ばれる利息計算器をガチャガチャと動かして計算をす、これも実に単調な仕事であった。計算をし、数字を記録したカードを作成する、人と会話することのない砂を噛むような業務であった。

結局、この作業を六か月ほどつづけた。しかし背がこったり、胸が痛くなったりしたので欠勤した。病院でレントゲンを撮ったところ、「肺門リンパ腺」と診断され、驚いた。上司であるＨさんに申告したところ、すぐやめて下さいといわれ、銀行は退職した。

いまでも、あの銀行での仕事は何であったのか、と反省的に考えることがある。

わたしは何をしていたのだとうか、と。

日本が復興に向け、驚異的な成長を遂げんとする、まさに歴史的な瞬間であった。さらにまた、そのような奇跡を目の当たりにできる、稀有な時代でもあったにもかかわらず、である。

しかしそのときわたしは、白いご飯を食べたいという欲と、外資系の銀行で働いて何がしかの「箔」を身につけたいと思ったのである。

外資系の銀行の仕事。それは社会の一隅にいて、人と会い、語り合い、汗を流すことで物事を進捗させ、微力ではあるが、日本の復興にかかわってゆく仕事ではなかった。それはひょっとしたら、青森で燻っていた青年が、日本の成長エネルギーと共感しあい、熱情に駆られて東京に向かって出奔した、当のわたしの「思い」を裏切る行為ではなかったか？

その熱い思いは、早稲田実業で机を並べて勉強したＫ君との再会により、かなえられることになる。わたしはＫ君の紹介により、とある商社で働くことになったのである。

トンカツと引き換えに外資系銀行に入行したことは誤りであった。そのあやまちが「肺門リンパ腺」を患うことでただされ、また友との再会により、わたしは本来、すべき仕事に巡り合うことができたのである。それは筆舌にしがたい僥倖であった。

人にはそれぞれ「運命」と呼べるもの、――それを天命と言ってもいいかもしれないが、そういう人知を超えた力が人生を左右する。そのようなことをいま、つくづく思ったりもするのである。